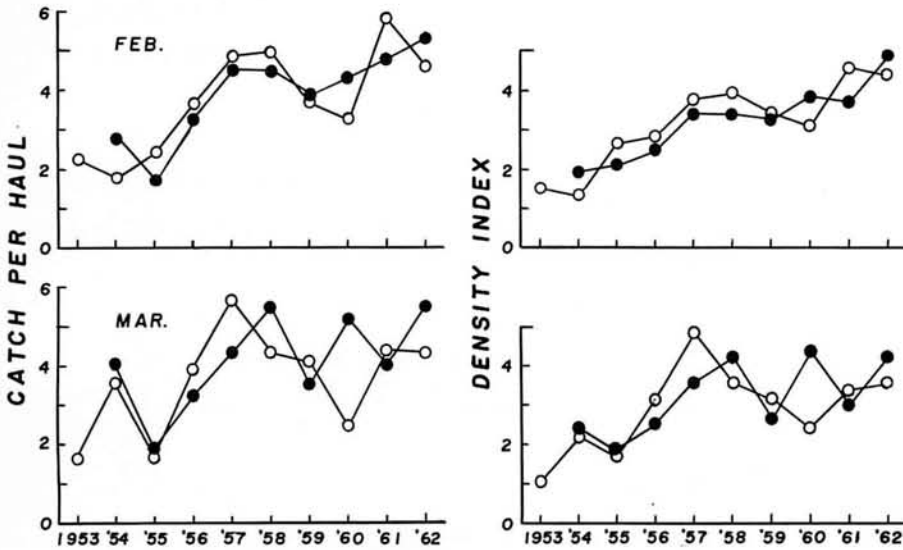


することができる。



オ3図 東シナ海系 population の2、3月の分布域における1網平均値と資源密度指数の経年変化(白丸)と水温変化によつて補正した値の経年変化(黒丸)。

6 カツオと黒潮との関係について

川崎 健 (東海区水産研究所)

1) 移動経路

従来、春から秋にかけて東北海区に現われるカツオは、黒潮に乗つて薩南から伊豆諸島水域を経て来るものと、常識的に言われて来た。しかし最近の東北水研の研究は、このような移動経路には否定的である。その理由は以下のようである。

- (1) 薩南海区の4月までの漁獲量および伊豆諸島海区の5月までの漁獲量と東北海区の漁獲量との間には相関がない。
- (2) もしカツオ群が伊豆諸島水域を経て東北海区に来るものであれば、東北海区に最初に漁場が出来た場合の体長組成と、同時期の伊豆諸島水域の体長組成とは同じでなければならない。ところが、往々にして非常に違う場合がある。
- (3) 野島崎東方水域においては、5月から6月にかけて東西に伸びるピンナガ竿釣漁場が形成され、このピンナガ漁場でカツオが混獲される。この混獲のされ具合をみると、ピンナガ漁場を南北に縦断する形でカツオが漁獲され、列島線のすぐ東側の水域ではカツオが漁

獲されない。このことはカツオが列島線の沖側を北上していることを示している。

- (4) 戦前から戦後にかけて、薩南・紀南・伊豆諸島水域で放流され再捕されたものは、すべて放流点の近くで再捕されている。このことは、島嶼水域が回遊性のカツオの通過する道筋ではないことを示している。

2) 漁況変動

一般に漁況変動という言葉は、2つの内容を持つている。その1つは米遊した資源の大きさによるものであり、他の1つはそのとられやすさによるものである。この後者は、主として海況変動に依存している。

紀南から伊豆諸島にかけての水域では、この2番目の要因が強く働いている。すなわち、この水域に冷水塊が発生し、黒潮が大きく迂回して伊豆諸島を南から洗い、更に遠州灘に入つて渦流域を形成する場合に漁況がよい。このことは、変動性の大きな環境を好む、カツオの適応性の反映である。

一方東北海区では、前者の要因が支配的で、黒潮の変動が漁況におよぼす影響は小さい。これはカツオが適応性の大きな魚種であるためであり、又漁船の稼働範囲が大きいので、局地的な漁況の良否が、全体として打ち消されるためである。

サンマと黒潮との関係について

堀 田 秀 之 (東北区水産研究所)

東北海区における秋季南下のサンマ漁場の位置について、大正14年(1925)から昭和39年(1964)の9月下旬の漁場形成の範囲と中心区域とを、緯度には無関係に経度線だけによつて、その経年変化をみると次の様になる。

大正14年～昭和4年の期間の主漁場は例外なく 146° E以西となつている。

昭和5年～7年では主漁場が 150° Eから三陸沿岸まで広範囲に拡がったり、或は 148° E～ 149° Eの沖合と 146° E以西の近海との2つに分離したりして、平均的に前期間よりも漁場位置は沖寄りとなつている。

昭和8年～14年の主漁場は 146° E以東の沖合で、時には 150° E以東の遠洋水域にまで達した程である。

昭和15年～18年の主漁場はいずれも 146° E以西の近海で、しかも年々岸寄りとなつてきている。

昭和23年～25年もいずれも近海漁場であるが、前期に比して若干沖寄りとなつている。

昭和26年～28年の漁場はいずれも 145° E以西で、前期よりも更に近く 145° E以西